

## 一・鉢の子に

花を供える三首の歌からなります。托鉢中、子どもたちが良寛から鉢の子（僧が食事や托鉢で喜捨を受ける際に使う器）を奪い取り、春の野の花を入れ拜んで托鉢の真似をしている姿を詠んだと言われている歌と、秋の野に咲く萩、すすきを折ってこちらも過去・現在・未来の三世の仏にお供えしようという歌。

対になっているような二首の間に、備中玉島（岡山）の円通寺で十二年の修行生活のうち、三十四歳から五年の諸国行脚の際でしょうか、「西行法師の墓に詣でて花を手向けて」詠まれた歌が歌われます。

## 二・今日わかれ

人の存在の不確かさを突き詰めるような一首を冒頭に、体調が勝れずたまに訪れてくれた友人を心ならずも帰してしまった申し訳なき、友の訃報に触れた際の痛切な想いが歌われた二首からなります。

諸国行脚を経て故郷に戻ったあとも、生涯寺に属さず、藩主からの声掛けも辞退し、納屋や草庵などさまざまな場所に仮寓・居候しながら托鉢にたより、ときには山菜や野草を採るなど清貧な暮らしに徹した良寛。元服前に学んだ家塾「三峰館（狭川塾）」時代の旧友など風流を語り合える友が何人かいたそうです。貧しくも、友人たちがふらりと訪問できるような人柄や暮らしぶりも想像されます。

## 三・風まじり

四歳下の弟で、兄の出家で名主を継ぐことになった次男・由之（ゆうし）の日記にも、良寛が亡くなる一年前の一八三〇（文政一三）年に見える長歌一首。

家出から四年、この弟が名主見習い役となつて良寛は出家を許されることになります。危篤の知らせを受け駆け付けた由之と貞心尼に見守られ、亡くなる直前まで弟に詩を送ったり、貞心尼と和歌の唱和を行ったりしながら、良寛は七十四歳で座したまま息を

引き取ったそうです。

## 四・つきてみよ

「良寛さん」という子どもたちと一緒に手まりをつきながら遊ぶ温厚な老僧の姿を思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか。子どもたちと遊ぶ良寛の様子を描いた「手まり上人」という一文によると、良寛は、袖の中にいつも手まりを二つ三つ忍ばせていて、子どもを見つけるとそれを取り出し、一緒に無心で遊んでいたそうです。

しかしこれは良寛の留守宅を訪れた貞心尼が手まりをそえて置いていった歌に答えた返歌。

良寛が万葉集に詳しい、と聞いた貞心尼が初めて来訪したのは、良寛七十歳の秋のことでした。以降四年間、貞心尼は良寛を師と仰ぎ、仏教と和歌についての教示を受けます。二人の年齢は四十歳離れています。精神的な恋愛関係にもあったように思われます。貞心尼は幕末には最初の良寛詩集「良寛道人遺稿（一八六七）」の出版に尽力したり、二人が唱和した歌を中心として歌集「はちすの露」をまとめるなどしつつ、明治まで生きました。

## 五・あは雪の

淡雪は春先に降る泡のように消えやすい雪。「みちあふち」（三千大世界）は古代インドの世界観における全宇宙。こだわりやとらわれを手放し、目の前の風景に無限の広がりや深みを見、しずかに佇んでいる姿が思われるような作品です。

（吐月美貴）